

# 曙光

(しょうこう)

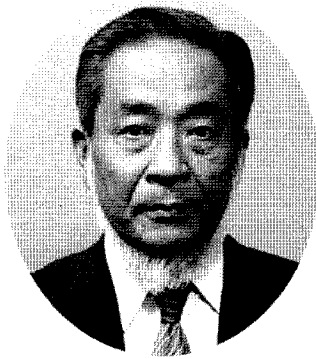
2002.10.1  
東北大学大学教育研究センター広報 No.14



キャンパス風景

- ◎全学教育と情報リテラシー  
東北大学副総長 小田 忠雄… 2
- ◎本格的にスタートした基礎ゼミ  
全学教育審議会基礎ゼミ委員会  
委員長 田中 継根… 4
- 退官(予定) 教官から
- ◎白日夢想 経済学研究科  
教授 柴田 信也… 6
- ◎赤道へ — 私の機縁—  
理学研究科 地震・噴火予知研究観測センター  
教授 浜口 博之… 8

- ◎同じことを考え続けて35年  
医学系研究科障害科学専攻  
教授 山鳥 重… 10
- ◎個の体験を通じた学問へのモチベーション  
情報科学研究科 教授 樋口 龍雄… 12
- 退官教官から
- ◎ユゴー『笑う男』・監房の半日など  
東北大学名誉教授(法学部) 莊子 邦雄… 14  
(1984年4月定年退官)



## 全学教育と情報リテラシー

副 総 長（研究担当） 小 田 忠 雄

平成14年4月から全学教育の新しいカリキュラムが完全実施されています。

平成11年2月から平成13年3月まで行われた全学教育改革検討委員会における検討以来ここに至るまでに大変なご尽力を頂いた関係者各位に敬意を表します。この全学教育は教養部や教養学部等の専門組織によらない全学的体制の下で行う「教養教育」であり、本学独自の数々の工夫がこらされています。その一つである「基幹科目類」では、人間論群、表現論群、学問論群のそれぞれから1科目を選んで履修することが文系・理系を問わず必修になっています。学問論群の中の「現代学問論」という科目では、定年を控えた教官3名が一組になって、自分の行ってきた研究を題材にして学問を論じ、最前線の研究者にとって学問がどのようなものであるかを学生諸君に学んで貰うことになっています。筆者も、有機化学と政治学を専門とされる先生方と組んで、数学に関する講義を平成14年4月から5回行いました。これまでせいぜい50名程度の学生諸君を対象にした数学講義の経験しかありませんでしたので、A200の大教室で約220名の諸君を相手に講義するというのは全く新しい経験でしたが、講義直後の短い時間に沢山の質問を受けたり、かなり意欲的なレポートもあって楽しい思いをしました。数学では知識の積み上げがないと本格的な内容に入れませんので、話題の選択には苦労しましたが、正多角形の作図という目に見えるテーマを題材に、数学の研究成果の形には3種類あることを紹介しました。

即ち、①解を具体的に求められる場合、②解があることは示せるが具体的にそれを求めることはそれほど簡単ではない場合、③どんなに頑張っても解が見つけれないことを理論的に証明できる場合、の3種類ですが、例えば②は情報セキュリティに縁の深い「暗号」にも関わってきます。定規とコンパスを規則に従って利用し正五角形を作図できて感激したとの感想を書いたレポートや、正17角形を見事に作図したレポートもかなりあり、講義のし甲斐がありました。

さて、表題の「情報リテラシー」は情報活用能力を意味しますが、全学教育の「共通科目類」の中に、外国語科目と並んで「情報科目」を設け、全員必修の形で学生諸君の情報活用能力を涵養しようというのも新カリキュラムの特徴の一つです。

大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（平成10年10月）は、「学生の課題探求能力の育成」を大学改革の基本理念の一つとして謳っていますが、情報洪水の中で、課題探求に必要な情報を的確に見出し、また、自らの確に情報を発信するためには、早い段階で情報リテラシーを身に着けることが不可欠です。

情報技術に関する既修者や腕に覚えのある学生諸君対象の「情報基礎B」もあるようですが、大部分の学生諸君が履修する「情報基礎A」は、「情報技術が広く多様に織り込まれた現代社会において、将来に渡ってそれらと良好に付き合うための基礎体力を養う」ことを目的としています。原理的事項

を土台に、情報処理・情報活用・情報倫理を3本の柱としてUNIXシステムを利用した実習本位の授業により、大学生として文系・理系を問わず身に付けておくべき基礎的な知識と技能を獲得することになっています。

情報シナジーセンターの静谷啓樹教授によりますと、情報基礎に関する全学共通の講義ノートウェブで公開しているので、自発的にどんどん進んで勉強し、かなり先の教材に関する質問をする学生諸君もいる由です。全学必修科目の講義ノートをウェブで公開しているのは本学では初めてではないでしょうか。

また、情報基礎Aの内容の理解が十分ではないと自覚した学生諸君のための情報基礎A復習コースを、情報シナジーセンターの利用者講習会として開催して頂いている等至れり尽くせりです。

ところで、情報基礎を受講する際に不可欠なのは情報シナジーセンターのアカウントですが、平成10年度以来、新入生諸君全員に2年次まで支給されています。「情報基礎」受講時以外にも、このアカウントを通じて世界中の情報にアクセスできます。授業時間以外に情報シナジーセンター実習室でアクセスできますが、総長裁量経費によって附属図書館本館ロビーに設置して頂いた40台の大学教育研究センターの情報教育用X端末は、夜間・土曜日等も含めた開館時間中に自由に利用できるためかなりの利用率（全ログイン数の約30%）の由です。

その他に、今年度から川内北キャンパスでの情報コンセントや無線LANを通じたアクセスも可能になったようです。アカウントのユーザー名とパスワードで認証するというシステムによりセキュリティにも十分配慮されており安心です。本学の誇る超高速ネットワークシステムTAINS/Gを情報教育にも十分生かす体制が整っているわけです。

情報の宝庫である附属図書館も情報リテラシー教育支援で重要な役割を果たしています。入学式直後の学務部主催オリエンテーションで、図書館長として新入生諸君に図書館及び情報環境を紹介していますが、附属図書館本館では、約1時間の新入生オリエンテーションを入学式後の5日間に毎日3回実施し、また、学部・研究科と協力して授業の一環としての利用教育、情報検索技術講習会等も行っています。

ところで、「情報シナジーセンター」は、旧大型計算機センター、旧情報処理教育センター、旧総合情報システム運用センター、附属図書館（一部）を統合して平成13年度に設置されました。「協働」や「相乗」を意味する「シナジー（synergy）」の言葉通り、附属図書館の電子図書館機能・情報リテラシー教育支援機能、総合学術博物館の電子博物館機能、史料館の電子公文書館機能、事務局の電子の情報公開機能、を統合して相乗効果を発揮する「情報シナジー機構」の中核的組織が情報シナジーセンターであり、全学教育のみならず、本学の全ての場面で今後ますます重要な役割を演じるものと期待しています。



## 本格的にスタートした基礎ゼミ

全学教育審議会基礎ゼミ委員会委員長

田 中 継 根

本学の全学教育改革の目玉の一つである基礎ゼミが本年度から本格的にスタートし、現段階（7月末）ではほぼすべての授業が無事に終了しました。ご担当下さった先生方、そして準備のためにご尽力下さった全学教育室に心から御礼申し上げたいと思います。

基礎ゼミを本格的に始めるに当たり、いささか心配したことがあります。学生のクラスへの振り分けについてです。振り分けシステムそのものは全学教育室の方でしっかりしたシステムを作成して下さったために、混乱が起こることは考えられず、その点では安心していたのですが、問題は一部の授業に学生が集中し、そのため、意に添わない授業を受けざるを得ない学生が多数出るのではないかとということでした。ところが、いざ蓋を開けてみると、心配をよそに、学生の志望が驚くほどきれいに分散してくれたのです。担当の先生方がそれぞれに魅力的な講義題目（ということは勿論中身も魅力的だと思います）を考えて下さったということではないでしょうか。

総クラス数144という大編成となりましたが、この中には、11人の本学名誉教授がおられますし、また自部局のノルマ以外に自主的に開講して下さった熱心な先生が数人おられます。

講義題目のリストを眺めているだけで、胸が熱くなる思いがします。もう一度学生に返ることができるとしたら、是非出てみたくなる授業がいくつもいくつもあります。私の知り合いで各種の公開講座に積極的に出ておられるある名誉教授の方が、「教わるってことは本当に楽しいことですね」と感慨を込めておっしゃっていましたが、そのお気持ちがよくわかるような気がします。ざっと眺めても、例えば「西欧から見た日本文化」、「授業を作ろう」、「仙台の都市問題について考える」、「臨床倫理学入門」、「科学者を目指すということ」・・・恐らく、多くの学生がワクワクするであろう授業が目白押しなのです。きっと実り多い、学生にとって非常に有意義な授業が展開されたことと想像されます。

少人数教育の重要性が多く大学の大学で認められ、開始されていますが、本学でも試行段階の転換教育Bを経て、いよいよ本格的にスタートしたということです。基礎ゼミの趣旨はと言えば、教官による一方的な知識の伝達ではなく、発表・討論・見学・実習などの体験的・参加型の学習を重視するものであること、教官と学生、また学生相互の人的つながりの形成を目指すものであること、大学教育へのインシエーションの意味を持っていることなどとなるでしょう。このような趣旨が全学的に相当程度浸透してきているものと思われませんが、もっともっと徹底させる必要があると思います。このことは、学生による授業評価からも明らかです。

昨年度の転換教育Bでの学生による授業評価では、プラスの評価として、「学生が主体的に学べる良い授業だった」、「いろいろな人の人生を聞くことができ、数え切れないことを学んだ」、「実際にものを作ったり、企業を訪問できて非常に興味深かった」など、基礎ゼミの趣旨に添った授業が行われ、

それが学生を非常に喜ばせたことがわかる一方、「せっかくの少人数制なのだから、もっとフィールドワークをした方がいい」、「もっと討論が活発になるようなテーマを探して参加できるような授業になればいいと思う」のようなマイナスの評価もありました。基礎ゼミの趣旨に添った授業をすることがまさに学生たちから求められていることがわかります。そのような授業に対しては、「こんな授業を待っていた」とか「毎年やって欲しい」というような、教師冥利に尽きるような評価がたくさん寄せられました。

7月に実施された学生による授業評価はまだ結果が出ておりませんが、昨年度の転換教育Bに比べて段違いの規模で行われた基礎ゼミですから、上に書いたような学生の希望、評価はより明確に現れるものと思われます。楽しみでもありますし、怖い部分もあります。学生による評価を厳粛に受け止めて、基礎ゼミをよりよいものにしていく努力が必要だと思えます。授業評価の結果は11月に予定されている基礎ゼミFDの場で、来年度ご担当の先生方にご披露したいと思えます。

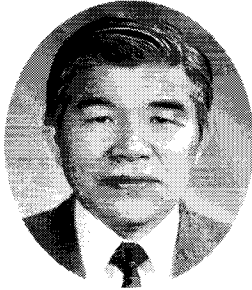
教えることは、言うまでもなく学ぶことと表裏一体のものです。それは、教えるためには先ず十分な研究が必要であるというだけの意味ではなく、教えること自体が学ぶことであるという意味でもあります。特に基礎ゼミのような少人数・双方向型の授業では、教官もまた大いに学ぶことができるのではないのでしょうか？ ある名誉教授の方が、「本当に楽しく授業をやっている、学生から教わることも多いんだよ」と、とても嬉しそうに話して下さったことが印象に強く残っております。

基礎ゼミ委員会では、今年度の担当教官全員にアンケートを実施する予定です。基礎ゼミという授業そのものの在り方への注文・提案、授業を遂行する上で遭遇した困難、またいろいろ工夫してうまくいった場合はそれを、更に反省点があればそれも書いていただき、来年度以降の基礎ゼミの改良のために役立てようと考えております。

基礎ゼミをよりよいものにしていくためには克服すべき問題がいろいろあると思えます。現時点でわかっている問題点としては、次のようなことがあります。先ず、川内での授業の場合、小教室が足りず、大きな教室でやらざるを得ない場合があることです。ある名誉教授の方から「大きな部屋が当たってしまってとてもやりにくい、来年はもう引き受けたくない」と言われてしまいました。また、学生の希望がきれいにばらけたと上にも書きましたが、文系・理系の点で見ますと、文系または理系の学生が集中している授業がかなり多いということです。基礎ゼミの趣旨から言えば、どの授業も文系と理系の学生が適当に混ざっていることが望ましいのですが、実情はなかなかそうはならないようです。募集の段階で、一工夫必要かも知れません。更に、基礎ゼミは多くの学部で必修となっていますが、必修ではない学部も幾つかあります。学部の事情もあるのですが、できれば全学部で必修としたいものです。

私の個人的な夢は、基礎ゼミを自主的に担当して下さる先生がもっともっと出てくださることです。現在は部局の人数に応じた課題数を出していただいているのですが、将来は逆に、部局の人数に応じた課題数しか認めない・・・とはならないまでも、多すぎる課題数が殺到して委員会が嬉しい悲鳴を上げるくらいにならないだろうかということです。基礎ゼミの実施方法に地道な改良を重ね、担当の先生方全員がその趣旨に添った熱心な授業をなさって下されば、いずれ必ずその成果がはっきり学生の勉学態度に現れるようになるのではないのでしょうか？ そうなれば基礎ゼミの重要性が本当に全学的に認められるでしょうから、各部局が競って多くの課題数を出そうとする日が来ることも夢ではないかも知れません。

退官（予定）教官から



## 白日夢想

経済学研究科教授

柴田 信也

いつの間にか思いもしない長い時間が過ぎ、いたずらに馬齢を重ねてきたものだ、と自分でも半ば驚きつつ、来し方を振り返ってみると、多少の感慨も湧いてくる。その一つは、客観的な体力の低下は歴然としているのに、現時点における自分がまだ青春時代の単純な延長線上にあって、この間に、内面的な意味での、ある種の断絶や飛躍の自覚もないままに、一瞬にして今日に至った、という実感である。つまりは、何らの成長も遂げなかった、ということであろう。正直なところ、これは、子供の頃に、今の私の年齢層に属する人たちに対して抱いていた距離感とは逆方向の、不思議な感覚である。

とはいっても、私も時として次のような夢をすることがある。もしも、メフィストフェレスと契約を結んだファウストのように、現在の時間を、自分の望む時期——例えば18歳の頃——に自由に戻すことが許されるならば、そのときに、自分はどんな生き方を撰ぶであろうか、と。そうしたことが、現実には絶対的に起こりえないという意味では、それは、文字通り夢想・妄想に過ぎないが、他方で、この夢想は、どう頑張ってみても、精々、自分のこれまでの経験や知見に規定される範囲内でしか自由に飛翔しえないという意味では、何ほどの現実性を帯びた夢想でもありうる。

私は Political Economy を専門分野としているが、教師の常として、ゼミ生などから、屢々、さしあたりどんな本を読むべきか、どんな勉強

の仕方がよいか、といった趣旨の質問をうけることがある。事柄の本性上、こうした問いに対する特定の解などありえようがないから、「太初に行為ありき」——本の読み方は各人各様。ある問題意識から系統的に文献を読み進めていく場合もあれば、乱読を通して新たな問題意識や興味を発見する場合もある。要は経済学を専攻する者としての自覚をもって各自のスタイルで適当なものを読み始めればよい、といった一般的な答え方になってしまう。しかし、そうした紋切り型の言いぐさではなく、もう少し具体的な意見を述べて欲しい、と詰め寄られるならば、如上のような夢想境に逃避せざるをえないことになる。つまり、仮に、私がもう一度学生からやり直す機会を与えられるようなことがあれば、今度はこんな勉強の仕方をしてみたい、という希望表明である。

だが、考えてみればこれもおかしな話である。自分が嘗てやらなかったこと、あるいはやれなかったことを、無媒介に他人に推奨することになるからである。しかし、実は、これこそ人生における絶対的な矛盾なのであろう。豊富な時間を惜しげもなく浪費し、それを浪費と感じないのが、まさに青春時代の特徴なのであり、自分に残された時間の多寡を、自覚的に意識するようになった者のみが、無為に過ぎ去った時間の山を悔い、前方に残された僅かの時間をいとおしいと感ずるのである。

ともあれ、現在の境地にあって、ただ肉体的

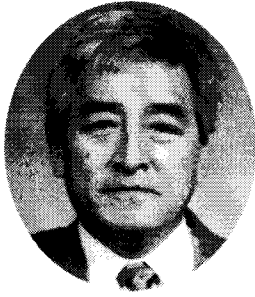
な若さと学生時代をやり直すチャンスとを与えられるならば、元来不器用な私は、勉学に対する基本的スタンスを、これまでと大幅に変えることはないであろうが、時間の使い方に、若干の改善を試みるであろう。

まず、大学在籍中のできるだけ早い時期に、できれば複数の外国語を、一定程度の水準において、マスターすることを目指すであろう。できるだけ早期にというのは、単純に、記憶力の旺盛なうちに、という意味合いであり、語学修得のためのエネルギーの支出とその成果、という観点からの合理性を含蓄している。（実は、私は50歳を過ぎてから、一朝思い立って、或る外国語を新たに習い始めたのであるが、その成果は、それに費やした労力に比して、誠に惨憺たるものであった。）

地球規模での人的な交流、物流、通信・情報量等の増大を意味する限りでの globalization が、今後、ますます進展することが不可避な情勢であるとすれば、外国語が必要とされる度合いも、それに照応して増大するであろう。だが、このような技術的な要請のみが問題なのではない。昨今のグローバル化には、他の側面がある。それは、市場経済的な価値観が、世界の隅々にまで、いわば爆発的に浸透しつつある、という一面である。しかし、私は、この方向性は、いずれその限界に突き当たらざるをえない、と考えている。したがって、多元的な価値観や多様な文化が平和的に共存する世界こそが望ましい、とする立場を取るならば、多くの言語を相互に理解し合う関係は、将来、いよいよ重要となると思うのである。つまり、言語は、民族や

文化を規定する、中核的なファクターの一つであり、他言語の修得は、異文化の理解そのものだからである。多元的な価値観や多様な文化が少しの違和感もなく共存する所、それが本来の大学というものであろう。

一方、読書の在り方については、古来、多くの先達によって言い古されてきたように、私もまた、まずは、古典と称される文献——当面の研究テーマと関連する——から読み始めることを基本に据えるであろう。しかも、そのさい、原典主義を旨とするであろう。ここで古典とは、すでに社会的な評価が定まった学的巨人の著作、という含みであり、原典主義とは、解説本に依らず、終始著者自身の言葉と向き合う、というほどの意味である。それらの古典は、総じて、その時々時代の提起している問題性的確な把握、対象の本質に迫る分析力、体系的な叙述等の点で、凡百の時流におもねる諸論からは超然としている。無論、いかに卓越した古典的著作といえども、それが書かれた時代の制約からは完全に自由たりえないであろう。だが、そうした古典の意義と限界をかけるものとして把握するためには、そう判断する根拠・基準が読む者に明確になっていなければならない、という難題が伴う。これは学問に内在する矛盾であり、この矛盾は、基本的には、勉学の進展のなかで自ら解決する以外にはありえない性質のものである。こうした自助努力を補完する制度的枠組みが、大学の講義や演習である、と考えていいであろう。いささか古いタイプの大学像であることは充分承知の上であるが。



## 赤道へ — 私の機縁 —

理学研究科 地震・噴火予知研究観測センター教授  
 浜口 博之

ニイラゴンゴは、標高3,470mの活火山で、アフリカ大陸中央部の赤道下にある。その山頂には、火山口の中に溶岩の湖（Lava Lake）が継続的に存在し、地球上でも特異な噴火様式を示す場所である。この様な火山が、なぜ大陸の真ん中にあり、マグマがどのようにして地球の深部から供給されているか、まだ説明が与えられていない。

上の文章は、ヘミングウェイの小説「キリマンジャロの雪」の冒頭の名句を真似して表現した、私の火山研究の現場と問題意識である。副題に掲げた機縁は、もともと仏教の言葉で機会因縁の略である。辞典を引くと「末長く続くことの起るきっかけ」と訳されている。

私は、昭和33年に理学部に入学した。物理学者で随筆家でもある寺田寅彦と、昭和21年に起きた南海道地震の津波体験を語ってくれた両親の話などに影響を受け、地球物理学を勉強しようと思って仙台にきた。当時の教養部は西多賀の富沢分校（現在の理学研究科附属原子核理学研究施設のある所）にあった。2年目に、現在の川内北キャンパスの前身の川内分校に移転した。米軍のキャンプ地跡の建物を教室に改造したもので、すべてが真白いペンキで塗られやや異質な空間だと感じた。教養部の講義では、ノーベル賞受賞者の書いた教科書に新鮮さを感じたが、それ以外あまり記憶に残っていない。それに反して、塩釜での部活の合宿など足や体を動かした体験は今でも鮮明に思い出される。部活を通して、集団の一員としていろいろな基礎訓練をなしたことは有益であった。講義数も今

ほど多くなかったと記憶する。教養部時代は、まだ周囲の時間もゆっくりと流れており、一般教養として本に親しむことができた。

片平キャンパスの北門に通じる東一番丁の古本屋で手に入れた和辻哲郎の「鎖国」には大きな衝撃を受けた。日本はなぜ戦争に負けたかとの和辻の設問は、太平洋戦争の末期の幼年時に、疎開した田舎から山越に見た空襲の火映と重なり合った。14世紀の大航海時代のポルトガル人などの西方への視野拡大と、当時の日本の近代化への歴史を概観しつつ、「日本に欠けていたのは航海者ヘンリー王子の精神であった。そのほかにさほど多くのものが欠けていたのではない」という意表を突く結論の一つに奇妙な感銘を受けた記憶がある。歴史的な背景知識も少なく、すらすらと読める本ではなかったが、時間にまかせて何とか最後まで読んだ。「広い世界」を知ることの重要性に最初に出会った本であった。また、その後、折に触れて読み返した本でもある。

専門課程では、地球物理学科に在籍し、地震学について鈴木次郎教授から指導を受けた。昭和37年に助手になって数年後、プレートテクトニクスという新しい仮説が提案され、地球を理解するパラダイムの変換点に遭遇した。昨今は、プレートテクトニクスは覚えるものとして講義されているが、当時は、仮説の中身が正しいか否かではなく、信ずるか否かという時代の風を感じつつ輪読をした。この仮説の基礎となった1910年刊行のウェーゲナーの「大陸と海洋の起源 — 大陸移動説」も繰り返し読んだ。アフリ



カと南米の海岸線の奇妙な一致を手がかりに、大陸が水平に移動したとの仮説とその実証に向けた緻密な考察に、学問としての面白さを感じた。和辻哲郎の「鎖国」とウェーゲナーの本の間には、内容的に何の関わりもないが、2つの書物に現れたアフリカ大陸の海岸線が、私の中で奇妙な結合をしたのを思い出す。

私のアフリカ行きは、全くの偶然に訪れた。ウェーゲナーの本に出会って6年後の1971年に、コンゴ民主共和国の研究所に地震・火山の研究指導に一緒に行かないかと高木章雄先生（名誉教授）から声を掛けて頂いた。自分の中に蓄積されていた情報と一種の共鳴現象が起こり、何の迷いもなくコンゴに同行した。和辻哲郎やウェーゲナーの本に出会っていなかったら、私のアフリカ行きはなかったであろう。

当時のフィールドノートには、次のような印象が記されている。「目指す赤道直下のアフリカ中央部への旅は、一種の未知なるものへの好奇心と一抹の不安の重なる長い旅であった。丸木の柱にトタン板を敷いただけの空港から、研究所までの10kmの道程は、行けども行けども道路脇にバナナ畑が展開するだけで、研究所がほんとうにこの先にあるだろうかという風景であった」。イルサックと称される中央アフリカ科学研究所は、東アフリカ地溝帯という巨大な地球の割れ目の中の緩やかな斜面にあった。ここには、アフリカ特有の自然現象研究のために、ドイツ、フランス、ベルギー、イギリスなどから、「広い世界」を求めて研究者が来ていた。水中の炭酸ガス濃度が高くて魚が全く住めない水深500mの湖とか、山頂火口に高温の溶けた溶岩が沸騰し、夜間には真っ赤な火映が見える火山など、日本ではその存在すら想像しえなかった特異な自然が目の前にあった。

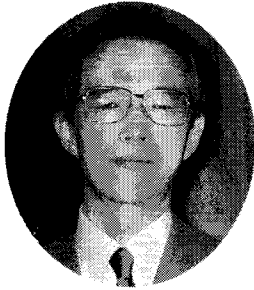
地震観測点の見回りの途中、何度か赤道を自

動車で横断する機会があった。その度に、ここが赤道という目印の看板のところで停車し、南半球から北半球へ歩いて渡った。赤道を陸路で歩けるところが地球上では以外に少ないことは、後に地図をみて分かった。以来、これまで20回以上、アフリカの地を踏み、ニイラゴンゴやニアムラギラ火山で野外調査・観測を行った。

アフリカでは、しばしば思いもしない事に遭遇した。1994年4月、ニイラゴンゴ火山の活動の活発化とほぼ同時期に、ルワンダ国内の民族間の紛争が激化し、100万人というおびただしい難民が、国境を越えてコンゴ国内に流入した。噴火するかもしれない危険な火山の麓に、30万人規模の難民キャンプが3つも設置された。そこは人口が極度に集中し災害ポテンシャルが高く、火山の脅威にさらされていた。難民問題は、そのほとんどが国内問題に原因があるといわれるが、国際社会を不安定にするもっとも今日的で複雑な問題のひとつである。自然災害の素因としての火山の噴火現象と難民流入という社会現象が、同じ場所で同時に進行する現場に立会うことになった。UNHCRや各国のNGO、PKOの方々など多数の国籍を有する人々と共同して難民キャンプの火山防災に努力したことも貴重な経験であった。

このような援助の現場では、多くの若い外国人の男女が働いていたが、わが国からの人々はほとんど見かけなかった。日本製の車をはじめとする援助物資や資金は、わが国からたくさん供与されているのに、それを現場で使うのは皆な外国の人々であった。

わが国は、まだ鎖国状態に近いのではないかと当時の錯覚が、私の脳裏に残滓のように残っている。



## 同じことを考え続けて35年

医学系研究科障害科学専攻教授

山 鳥 重

定年に際してお前の学問論を書け、ということ  
とです。

私は、少し斜に構えるのは得意なんです、  
正眼に構えるのは苦手なんでちょっと困って  
います。人様に向かって学問論を云々できるほど、  
学問を究めたかと考えてみますと、そんな境地  
からはまるで遠いところにいます。無我夢中  
で暮らしてきて、気がついたら、もう終わり、と  
いうのが実感です。

私の専門領域は神経心理学という名前と呼ば  
れています。医学、それも神経学（Neuron の  
学、Neurology の訳語）の領域に属し、その神  
経学の中でも、大脳損傷による認知障害を扱  
います。この問題が医者意識に捉えられたのは、  
そんなに古いことではありません。1861年とい  
うのが神経心理学という学問領域が誕生した年  
です。もちろん異論もあるでしょうが。

この年、Paul Broca という37歳の外科医で  
人類学者という当時のマルチ学者がパリ人類学  
会の例会で一つの剖検脳を示しました。その脳  
には左前頭葉後下方を中心とする鶏卵大の限局  
病巣が認められました。そしてこの病巣を抱え  
ていた人は、亡くなるまで20年にもわたって言  
葉がしゃべれない状態が続いていました。  
Broca は、この病巣とこの症状を関連づけ、こ  
の人が言葉を失ったのはこの大脳病巣のせい  
であると考えました。彼はその後も類似症例を集  
め続け、左大脳半球前頭葉後下方（後に Broca  
の発見をたたえて Broca 領域と呼ばれるよう  
になります）に発語の中枢がある、と結論する  
に至ります。大脳特定の領域が人間の特定の  
認知能力を担当している、という大脳機能局在  
論の誕生です。

この時代よりかなり前、すでに18世紀後半に  
は、Antoine Lavoisier が物質が元素からでき  
ていること、物質と物質の反応は元素と元素の  
やりとりとして記述できることなど近代化学の  
基礎を打ち立てていました。人々はモノは分解  
できる、という近代科学の方法論に身を固めて  
ゆきます。

精神も要素から成り立っており、その要素は  
脳の特定の領域に求められるのではないかと  
いう思考の道筋はすでに準備されていたわけ  
です。

この道を多くの人が歩き始めました。この道  
を歩く人は精神を分解して、要素的認知機能を  
割り出し、その認知機能の座を脳の特定の領域  
に求めようとします。たとえば、単語の文字心  
像のありかは左半球頭頂葉に求められ、書字心  
像のありかは左半球前頭葉中前頭回後端に求め  
られました。あるいは理性は前頭葉の外側にあ  
るとされ、意志もまた前頭葉の働きに求められ  
ています。自己意識は右前頭前野にあるという  
研究も発表されています。化学と似たような考  
えです。誰も明からさまには言いませんが、な  
んとか精神元素を追求しているような、そん  
な流れです。しかし、この考えはあくまで仮説  
なんですね。

精神が物質と同じように要素的なものから成  
り立っているのかどうかは実はよく分からない  
のです。物質的な考えになぞらえて具体的に考  
えないと、精神の構造なんてなかなかイメージ  
できないので、要素的なものから組み立てられ  
ているのだろう、と想像しているだけなんです  
ね。本当のところは分からない。

私は、心と脳の関係の不思議さというか、わ

けのわからなさになんとか引き込まれてしま  
って、わけのわからないまま、今に至ってしま  
いました。数えると、引き込まれて35年くらい  
は経ちますが、いまだに視界は開けません。

デカルトが言っていることですが、精神とい  
うのは物理現象と違って広がりを持ちません。  
モノのように空間を占拠する現象ではないので  
す。当然、目や手でしっかりと見たり、掴まえ  
たりできないものです。

その意味では、脳（脳はモノです）の働きを  
いくら追求しても、そこから精神は出てこない  
可能性があります。ニューロンの形態をいくら  
分析しても、形態のままです。ニューロンが働  
くと電気が出ますが、この電気はどうかとい  
うと、これもいくら微分しても積分しても電気  
のままです。精神と脳の問題というのはどこま  
で行っても平行なんです。二つの現象に対応はあ  
りますが、因果関係ははっきりしない。

対応関係というのは困るんですね。必然性に  
乏しい。いつでもうまく対応してくれれば二つ  
の関係はある程度は分かってくるものですが、  
なかなかうまく対応してくれない。これとこれ  
は対応しているぞ、と1つ発見したように思っ  
てドキドキしていると、たちまちそんな対応を  
示さない症例が出現して、世の中そんなに甘  
くないよ、突き放されてしまいます。

この心と脳のもつれを少しでもほぐしたい、  
というのがまあ私の学問です。

これは難問ですが、ひとつだけ分かったこと  
があります。それは分からぬ現象の前では素直  
でならなければならない、ということです。目  
の前に精神という現象が立ちはだかっている  
のですが、これを素直に見たいとつくづく思いま  
す。どういうことか、と言いますと、われわれ  
は現象をみるのに眼鏡をかけざるを得ない。つ  
まり、方法をもたざるを得ない。ところが方法  
を持つと、その方法でしか世の中が見えな  
くなります。目でものを見る、というのは1つ  
の方法ですが、目でしか世界を経験したこと  
のない人間には目が見えない人の精神世界は  
分からない。耳でしか世界を経験したこと  
のない人には

目でみる世界がどんなものかは分からない。私  
も同じで、自分の持っている方法でしか世界  
を見ないから、それ以外の方法で世界を見たら  
どうなるか、ということについてはまったく無  
知なんです。あるひねりをつけてしか、見る  
ことができない。ここからフリーになりたい  
と思っています。

ま、やっかいな問題にひっかかってしま  
いました。とはいうものの、何かあること  
についてこれ本当のところはどうなってるの？  
と、とことん本当を追求してゆくこと  
って、面白いですよ。わかってしまった  
ことって面白くないですが、わかって  
ないことって面白い。それがとり  
もなおさず、学問というものなん  
じゃないでしょうか。

話は跳びますが、

私の教室にはモットーがありまして、  
歩々これ道場

というのです。禅語の1つです。私が勝手に  
決めて、教室員に押し付けてきました。私がこ  
こにいる限りはこれが教室のモットーだ、と  
年に一回教室員の前で、演説してきました。こ  
こは学問道場だぞ、というわけです。

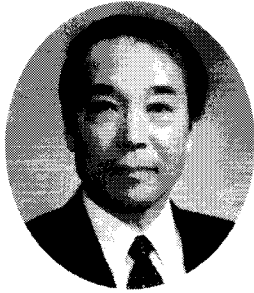
もう1つ好きな言葉に

憤一字、是進学機関。舜何人也、  
予何人也、方是憤。

というのがあります。西郷南州遺訓（岩波文  
庫）の中の手抄言志録で見つけた言葉です。西  
郷どんは佐藤一斎の言志四録を耽読して、そ  
の中から好きな言葉を抜き書きして、座右に置  
き、繰り返し読みました。それが手抄言志録。

教室のモットーはこっちにしようかな、とも  
思ったのですが、学問を目指すもののモット  
ーが、武士/政治家の愛した言葉ではちょっと  
おかしいかも知れません。それで歩々是道場  
にしました。

ま、古臭い言葉を並べましたが、私にとって  
学問のイメージは古臭いものです。道なんです。  
万古不易の本当を探し続けたい、そういう学  
問をやりたい、ということです。



## 個の体験を通した学問へのモチベーション

情報科学研究科教授

樋口 龍 雄

大学教育研究センター長としての星宮先生から、センター広報（曙光）に退官（予定）教官による学問論を掲載したいので書きなさいとお話を頂いた。普遍的な学問論はいささか荷が重くその不明を恥じるばかりであります。また、普遍的な学問論はそれぞれの立場で権威のある方々がこれまで多数述べてもおられます。そこで、自分の個の体験を通して、個の体験こそは「自分にとって学問のより根源的と思われるところ」を形成しているのではないかとの思いを述べることに致します。これも「現場主義」を標榜する本学ゆえにお許しいただけるものと思えます。その際、より根源的な事柄に触れるためには、どうしても話題が個人的になってしまうことをあらかじめお断りしておきます。

私が中学生の頃父からよく北御門良夫氏の話を知りました。氏は昭和十二年、本学機械工学科を卒業し某会社に就職しました。ある日北御門良夫氏は父を訪れ、「工場では機関銃を作っているが、どうしても武器製造に直接加担したくない」との理由からしばらく研究室において欲しいとの話でした。本人にとって当時の状況からすれば、そのことは弾圧を受けるかも知れず、経済的にも大変苦しくなることを意味します。父は研究室に迎え、氏は戦後国立大学の教授を務め、退官後は郷里の熊本で余生を過ごしました。そのような門下生北御門氏の生き方に対して、生前父は大変敬愛しておりました。

そのおり、良夫氏には面白い弟がおられるこ

とも聞きました。青年時東京大学の英文科に進むが授業に飽きたらず退学、死を覚悟して徴兵拒否を貫きました。いまは熊本の山奥で晴耕雨読の生活を送り、農民のように、いや農民として生きていると。それを語るときの父は、何か遠くを見ているようでもありました。本当は門下生でありながらそのような生き方ができる二人の兄弟がなかばうらやましく思っているだろうことは、中学生の私にもすぐにわかりました。

その頃私の兄は大学生で、親友と二人ザックを背負い九州の山々を数週間かけて踏破する計画を立てていました。その行程にはもちろん山登り姿で北御門氏を訪ねることが含まれておりました。当時氏は今のように名が知られているわけでもなく、真から農民でありました。農耕のかたわらトルストイ研究に専念しつつ、絶対的非暴力の思想と立場をとっていました。北御門二郎氏と兄との出会いはどのようなものであったか、ことさら聞いてはおりませんが、後の兄の生き方に何らかの影響を与えたのではないかと私は想像しております。一方私はといえはうらやましくもありましたが、兄とは異なる道を歩むべきであろうと思っていたこともあり、本学教養部学生の時九州ではなく、北海道の山々を踏破しました。

北御門二郎氏のことは、それから四十年とりたてて私の周辺では話題にはなっておりませんでした。というよりは氏の生き方についてことさら家族に話をしておりませんでした。北御門

氏とは、時代も置かれた環境も違います。表面だけ真似されても困るという意識が私にはありません。ところが今は社会人になった子供が、何かのことで北御門二郎氏の名を挙げました。たまたま東京の書店で、ある出版社から出されている氏のトルストイ翻訳を見つけ出し大変気に入ったという。これまでの翻訳家によるものとは異なる感動があったという。私がこれまでその名を挙げたことがないにもかかわらず、北御門氏が共通な話題になったことに内心驚きもしましたが、これを機会に初めて北御門氏とのこれまでの縁を語りました。

その後、NHK教育テレビスペシャル「イワンの国のものがたり」として全国放映され、熊本山奥が知られるようになりました。北御門二郎と澤地久枝との対話形式の本「トルストイの涙」エミール社も出版されました。いつまでも「晴耕雨読する一人の農業者」であって欲しいと切に願うものであります。

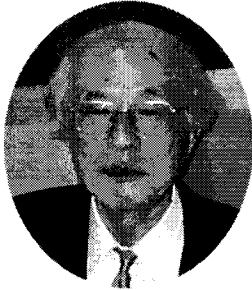
話はこれだけであります。しかし、中学生の頃から今日に至るまで、私は氏のことがずっと気になっていたことは間違いありません。北御門二郎氏と私には直接的な交流、関係はありませんが、冒頭述べました「自分にとって学問のより根源的なところ」をかなり形作っているような気がします。かつて矢内原忠雄は、師の内村鑑三との関係について「先生に個人的に親しく接近した弟子は、先生との間に思想や感情の衝突を来した者が少なくない。」ことにふれ、自分は「聖書の真理を学ぶ師弟の公的關係に限

定する態度を取り」の立場を貫いたことを記しております。この例を見るまでもなく、必ずしも個人的関係が緊密であるのがよいかどうかは、この際問題ではありません。

学問を志すとき、画一的ではない個の体験こそが他人とは異なるパワーを生み、学問へのモチベーションになるのではないのでしょうか。個こそが学問を生み出します。「自分にとって学問のより根源的なところ」はおそらくマグマのようにどろどろしたものかもしれません。そのためには青年期の人との出会いが大きいと思います。その頃私はわが道をいくタイプのおじいさんとか、峠の一軒屋の茶店のおばあさんとか、なにかそんな味のある人を尋ね求め、出入りをしていました。これらの出会いがらつぽで溶かすようにしてマグマになり現在まで学問研究をする活力になっているような気がします。

本学は多士済々の教官陣を誇っており体系的な講義やさまざまな工夫がなされよく整備されています。しかし、若い学生と教官との個の体験はほとんどみられません。東北大学という大きな組織のなかに小振りな「塾」のようなものを内包し、他の人とは違った画一的ではない個の体験をさせることはできないのでしょうか。どこの学部に属しているかには関係なく、希望する学生が個の立場で自発的に教官を尋ねたりしやすいシステムを作ることはできないのでしょうか。現状では学生の自覚を期待するのは遅すぎます。大変とは思いますが、時代に合った個の体験の仕組みが俟たれます。

退官教官から



## ユゴー 『笑う男』・監房の半日など

東北大学名誉教授(法学部)

莊 子 邦 雄  
(1984年4月定年退官)

今年、ヴィクトル・ユゴー（1802年-1885年）生誕200年にあたるということで、フランス各地で総計400を超える記念事業が1年にわたり繰り広げられているという。このようにフランスで破格の扱いを受けるのは、他でもない、ユゴーが、『レ・ミゼラブル』（1862年）、『死刑囚最後の日』（1829年）などを通じて「憐れなる人々」に降り注いだ愛情、また、この愛情の発露としての様々な積極的社会活動（たとえば、1849年と1869年の国際平和会議で議長を務め、基本的人権尊重の基礎である平和実現のため「ヨーロッパ合衆国」の理念をかかげた）を通じて、ひとびとの心底からの追慕を受けたためであろう。このユゴーが執筆した小説のなかに『笑ふ人』（1869年。ユゴー全集、復刻版、第3巻、平成4年）という、いかにもユゴーらしい、「人間愛」に満ちた、しかも、イギリス「貴族政治」に対する痛烈な批判を込めた小説がある。加藤周一は、このユゴーの小説を映画化した、無声映画の傑作『笑う男』（1928年、パウル・レニ監督、コンラート・ファイト主演）の復元版の上映に際して「夕陽妄語」（1999年5月22日「朝日新聞」13版）において次のように言う。「映画の主人公は、ジェイムス2世の宮廷の陰謀にまきこまれて処刑された貴族の長男で、幼時に口を大きく割かれ、絶えず笑っているかのような容貌をもって成長し、場末の道化師の一座に加わって、人気を博す」。「時が経ち、……主人公の血統が明らかにされて、アン王女は彼を貴族に列し、

……貴族の女との結婚を命じる」。だが、主人公は、「王は私を道化にした。女王は私を貴族にした。しかし神は、そのすべてに先立って、私を人間にしたのだ」と叫び、盲目の娘との恋を貫く。

ユゴー『笑う男』の「人間」宣言で思いだすのは、旧制高等学校文科乙類（ドイツ語を第一外国語）3年（現在の大学学部2年あたり）の2学期から約70日欠席し、ゲーテ、シラー、スピノザなどを通して「人間の自覚」という論文を執筆、昭和16年12月31日脱稿、翌17年6月公刊されたことどもである。そこでは、一切の権威をかなぐり捨て、「人間」として生きるべきであるということを情熱的に力説した。そして、この原稿執筆の余韻覚めやらぬ昭和17年2月、旧制高校卒業直前の学期試験で、東大経済学部安井琢磨助教授（のちに文化勲章受章）の講義した「経済原論」につき「自由に何を書いてもよい」というので、ワルラスは勉強して行ったが急に「ファウストの経済観」という題で答案を提出したところ、「これは経済の答案ではない」ということで百点中十点をつけられ、約70日欠席と合わせて教官会議で「落第」が問題となった。しかし、総合点の成績が文科乙類37名の中位にあったため「落第」を見合わせ、二月某日父兄同伴で出頭せよという通知を受け、父に知らせることなく一人で出頭したところ、「直ちに父親を呼べ」と言われ、飛んできた父親ともども、約10名の教官列立のもと、校長よりお

説教を受け、やっと卒業した（3名落第。文科乙類卒業生34名のうち、4名戦死）。

しかし、「人間の自覚」の強烈な余波は、なおも続く。17年4月中頃、京大文学部ドイツ文学科入学のため、吉田山の麓の学生寮で南京虫に刺されるなどして入学式を待機、入学式に臨んだが、式辞に強烈な疑問を抱くなどして入学を取りやめたのである（当時、大山定一ドイツ文学科講師には憧れを抱いていた。ツイ最近、「故大山定一教授をしのぶ」という献詞を「幻の恩師」に捧げた、拙著『近代刑法思想史研究』1994年）。だが、学生身分を喪失すると直ちに「徴兵」となるため、補欠募集をしていた九州大学の入学試験を受けて九州大学の法科に入学。しかし、昭和18年12月1日、文科系学生全員の「徴兵」猶予特権停止で「学徒出陣」。私も約2年間、「兵役」に服し、敗戦と共に九州大学に戻り刑法の研究に従事した。

昭和22年、約3ヵ月間、刑務所長の了解を得て、受刑者の舎房に自由自在に出入りし、受刑者と親しく接触した。真夏の午後、老受刑者が牢名主然として控える、広い雑居房に入って行き、暫らく話をした。間もなく眠くなったので、「昼寝をさせてくれ」と言って、約2時間程度、

舎房内で昼寝をした。起きたところ、老受刑者が「今晚、泊って行け」と言う。当時、占領軍は、看守に対して受刑者の人権を尊重しろという厳命をくだしていたため、看守が全般的に萎縮していた反面、受刑者は「自治委員」を選出して「受刑者自治」を部分的に実現するなど、刑務所は極めて特殊な雰囲気にも包まれていた（刑務所内の「工場」で、真夏の昼下り、両腕のない受刑者が上半身裸で肩に手拭いを掛け、「自治委員」として号令を掛けていた姿をありありと思い起こす）。このような刑務所内の情勢のもとにおいて、しかも、刑務所関係者が、わたくしが何所に居るかも把握していない状況のもとで、泊るだけの勇気は湧かなかった。そこで、「泊るつもりはない」と言ったところ、「それでは、歓迎会を開いてやる」と言う。当時、受刑者の舎房の鍵は自由自在であつたらしい。各舎房から多数の受刑者が集まり、私のために楽しい歓迎会を開いてくれた。ひとの善さそうな常習窃盗受刑者が、ドジョウすくいを踊った情景をありありと思い出すと同時に、老受刑者の親分が私を「人間」として扱ってくれたことに、今でも深い感慨を覚える。

## 平成14年度全学教育科目授業日程

10月1日（火）～12月20日（金）	第2・4セメスター授業
10月11日（金）	履修カード提出期限
10月11日（金）	履修科目届提出期限
11月2日（土）～11月5日（火）	大学祭（11月5日休講予定）
12月24日（火）～1月3日（金）	冬季休業
1月6日（月）～1月27日（月）	第2・4セメスター授業
1月17日（金）	大学入試センター試験に伴う休業
1月28日（火）～2月12日（水）	補講
2月13日（木）～	学期末休業

平成14年10月1日発行

編集 東北大学大学教育研究センター広報編集委員会（平成14年度）  
星宮望 大学教育研究センター長  
坂本尚夫 同センター副センター長  
溝越彰 国際文化研究科 教授  
本郷道夫 医学系研究科 教授  
葛生政則 大学教育研究センター助教授  
富田真 大学教育研究センター助教授

発行 東北大学大学教育研究センター  
Research Center for Higher Education,  
Tohoku University  
〒980-8576 仙台市青葉区川内

インターネットホームページアドレス <http://www.high-edu.tohoku.ac.jp>